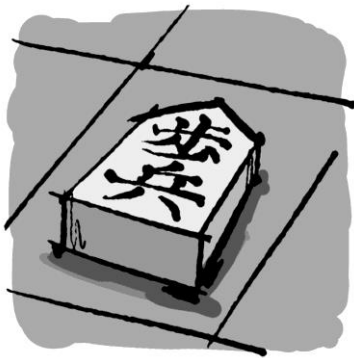


毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

将棋で長を王将にたとえるなら、一般人たちは歩だと思う。飛車、角、金、銀その他いろいろなものがあるわけだが、歩という駒は、一っだけしか先に進めず、横にも後にもさがれない、いわばもつとも能力の低い駒である。しかし将棋の格言というものがある。その中に、「歩のない将棋は負け将棋」というのがある。

たしかに王将ばかりでは将棋にはならぬもつとも数の多い歩、これがたいせつなのだ。会社でもどこでも、長ばかりではしようがないのだ。それよりも歩になりきる心、これが重大ではないか。一步一步と確実に進む。断じて後にはひかないぞというその気概。これで毎日の仕事をしつかりとやっていく。間ぬけといわれようが、のろまとあざけられようが、馬耳東風とばかりに、ぐいぐい仕事にうちこんでいく。長のいうことは大きくが、長の地位を狙っているのではない。一兵卒でもよい。最前線にあつても、強い相手のまっ正面にとり組まされてもよい。地位は最下位でもよいから、とにかくなすべき仕事をひとつ、ひとつ、しつかりとまちがいなく片づけていく。この心がけがもつとも尊いのではなからうか。地位とか、身分とかを願うな、といって、それは無理ともいえよう。長にはなる



歩になりきるころ

丸山竹秋

まいと思うこと自体が、ふつうの人には至難のわざだろうと思う。中には、「われ万人の下僕とならん」と最下にあることを念願した人もあるが、ふつうではなかなかできないことである。しかし長たることを目的とするよりも、毎日の仕事をたとえ下積みでもよいから、よろこびをもって、しつかりとやっついていこうという歩のころのほうが、はるかに尊いのである。世間歩がなきや成りたたぬ、のである。

長などという役目は、自分から求め、運動してなるのではなく、自然に他から認められ、推されてなるものである。実力がないうのに長になったところで、苦しいばかりだ。やがて転落が目に見えてやってくる。

ところで、この歩になりきるということが、じつは安易なことではできないのである。どつしりとした歩にもなり得ず、吹けばほんとは飛んでしまう、そうした軽々しい存在になりやすい。

「じつを申しますと、あなたなんか、ここにいってもいなくてもよいのです。できればやめて頂きたいのですが」とまわりの者から、ひそかに思われるようになって、どうしようもない。仕事ができる人でも、ねたみが強かったり、つまらぬことにすぐに腹をたてたり、反抗ぐせが強かったら……：そうしたところはそのつど、反省研究して、すこしでも改めていくようにしたいものだ。もちろん能力がないというようでは話にならないから、これも一つ一つ磨きあげていくことにしよう。（『いかに乗り切るか』より）